

## 半促成トマトの収益格差について

宮田 忠 男

(鹿児島県農業試験場)

MIYATA, T.

Studies on the Difference in Income of Semi-Forcing Tomato Farwing

施設野菜栽培では栽培環境が人工的に与えられることから、農家の技術差による農家間の収益性格差が大きいといわれるが、集団化による技術協定など技術の平準化で収益格差が縮少し栽培農家の定着と増加、産地の安定と発展、市場対応の強化が展開し得るとしている。

このことから薩摩郡宮之城町時吉園芸産地の半促成トマトを対象に農家間の収益格差をみたが、栽培の集団化、栽培技術の協定、共同育苗など実施されているなかで収益には大きな農家間差がみられ産地形成のうえから今後この対策が課題といえる。

## I. 調査農家の概要

調査は時吉園芸組合員全20戸を対象としたが、うち8戸は夜間管理1回の不注意から4月上旬に霜害をうけ6月以降の収穫が皆無となったので検討素材は12戸である。

経営形態は水稲+半促成トマトの専業農家で経営面積は平均113a(地域平均70a)家畜は全農家とも肉用牛を飼養している。

半促成トマトでは栽培面積が1,013~1,822㎡、生産量が12,451~22,634kg、販売額が1,116~2,199千円の範囲にある農家である。なお調査農家の位置づけのため1,000㎡当りの生産量を他農家と比較すると調査農家の平均生産量12,942kgに対し県内企業農家\*1では11,388kg、全国産地農家\*2では8,915kgで調査農家の生産量は高い水準に位置づけられる。

組織は農協委託販売(集選果施設利用)と共同育苗施設の利用を中心に生産から販売にいたる組織活動が活潑で昭和46年度、県農業祭において優秀農業生産団体賞を受賞している。

\*1 企業農家育成指導資料(昭和46年産16戸平均)  
県農政部

\*2 野菜生産費(昭和46年産全国平均)農林省

## II. 調査結果の概要

生産：1,000㎡当り生産量は10,793~15,769kgの範囲で平均生産量12,942kg、農家間差は4,976kg。

生産時期は3月下旬~7月中旬、生産の最盛期は5月を中心に4~6月で全体の93.1%を生産している。時期別生産の農家間差は4月が22.6~37.6%その差15.0%、

5月が31.4~42.1%その差10.7%、6月が24.9~32.7%その差7.8%で収穫が進むにつれて農家間差は小さくなる。

生産量と時期別生産関係では高位生産農家は収穫前期の生産量が少なく中~後期に多い傾向にあり特に生産量の最も多い農家と最も少ない農家ではこの傾向が顕著である。

規格別生産ではLの43%を最高に2L,3L,Mの順でLと2Lで65%を生産しているが高位生産農家では2L~4Lの大玉生産が多く低位生産農家では小玉生産が多い。この傾向も生産量の最も多い農家と最も少ない農家に顕著である。

品質別生産では秀品57%、優品34%、良品9%で収穫が進むにつれて品質は落ちてゆく。農家間の品質差は秀品が52.7~66.3%でその差13.6%(1,000㎡当り3,490kg)優品が28.0~37.6%でその差9.6%(1,000㎡当り2,947kg)良品が21.4%の差(1,000㎡当り2,495kg)であるが秀品の差は4月までの生産に差がみられ5月以降にはさほどの差はみられない。

販売：秀品と優品は農協共販、良品は自家販売で1,000㎡当り平均販売額は1,188千円うち農協共販額は1,114千円(93.8%)農家により1,012~1,414千円の範囲にあってその差額は402千円である。なお時期別販売額、規格別販売額、品質別販売額は生産状況と同じ傾向にある。

販売価格：平均価格はkg当り96.80円で農家間差は4.81円と大きな差はないが価格の高い農家は生産が前期に多い農家である(価格構造と品質面)。

日別の高値と安値の価格差は大きく全期の平均価格差は66.40円で価格差の最も大きい日で112.50円、最も小さい日で37.50円もあり品質間での価格差をはるかにうわまわっている。

時期別価格は年間をとおして中~下位の価格期で収穫が進むにつれて価格は下落してゆくが、収穫後期は年間最下位の価格期となる。しかし年次間における月毎の価格中は4月が最も小さく年間では最大の価格安定期であり半促成トマト栽培ではこの期に生産割合を高めた方が有利である。

時期別価格の農家間差はさほどなく3~6月までは6

円程度の差で7月が22円の差となっているが7月は収穫終期で生産量も少なく問題でない。

品質別価格はkg当り秀品が100.44円優品が90.66円でその差は9.78円であり農家間では秀品が4.29円の差、優品が2.72円の差である。

時期別の秀品と優品の価格差は3月下旬の38.25円が6月下旬には6.50円となり収穫が進むにつれて品質間の価格差は小さくなる。

規格別価格は2Lを最高に3L、Lの順でこの3規格は平均価格をうわまわるがM以下は平均価格を大きく下まわる。

生産費：1,000㎡当り第1次生産費は平均553千円（労働費を除いた場合234千円）農家により438～631千円の範囲にあってその農家間差は193千円（労働費を除いた場合130千円）であるが農家間差の大きい費目は労働費\*1の88千円、農具費\*2の82千円、園芸施設費\*3の32千円、肥料費の14千円である。しかし肥料費を除き生産量や品質、規格など生産に直接影響を与える費用ではない。

1\* 労働時間は栽培管理など平均値をとっているの  
で労働時間のちがいは収穫量による収穫調整出  
荷労働による。

\*2 農具費は利用割合にもとづく償却費が主体。

\*3 園芸施設費はハウス償却費が主体で農家の費用  
差はハウス資材（パイプ、竹棍）による。

流通諸経費は1,000㎡当り175～334千円で平均266千円（販売額に対する負担率24.4%）その農家間差は159千円であるが、この費用は手数料のみが販売額に対する負担で他は出荷量に対する負担であるので価格が高いほど流通諸経費の負担率は軽くなる。そのことから収穫前期の費用負担は軽く価格の高い農家ほど負担は少ない（3月下旬20.9%、7月中旬34.8%）。

収益：生産、販売、価格、生産費にみられるように農

家間にはそれぞれに大きな差があり結果として農家間の収益格差は大きい。

1,000㎡当り平均粗収益	1,187,517円
1,000㎡当り平均所得	661,459円
1日当り平均所得	3,311円
平均所得率	55.7%
収益格差	
1,000㎡当り粗収益	1,034,158～1,413,544円
	差額 329,386円
1,000㎡当り所得	534,694～837,763円
	差額 303,069円
1日当り所得	2,632～4,444円
	差額 1,812円
所得率	50.8～65.5%
	差額 14.7%

以上の結果から収益格差を規制する要因をみると最終的には生産量によって収益格差規制要因の93%（相関係数0.965）までが説明されるしその中でも規格L以上の生産量で73%までが説明される。

#### 残された問題

1 産地において収益の農家間差をみたがつまるところ技術的操作の結果として具現する生産量に収益格差の要因はしぼられる。このことからこれら生産結果がいかなる技術的格差によって具現したかを技術の分野から究明することが要求されるし今後の技術指導は栽培基準など一律のものでなく生産結果をふまえた個別指導が要求されよう。そのためには農協の役割も販売、諸資材の調達、技術指導のほかに関々農家の生産結果を細かく集計し生産者と技術指導者に資料を提供することが重要でこれによって生産者自からの改善意欲の高揚と技術指導の参考となるであろう。